

中国語における日本語の借用と意味変化

—— “赤字” を例として ——

戸谷将義

要旨 日本語の「赤字」には「支出が収入より多いこと」という意味がある。この「赤字」は1930年以降に新語として流行し、急速に使用が拡大した。現代でも同様の意味で使われている。一方、中国語における“赤字”にも「支出が収入より多いこと」という意味がある。この“赤字”は1931年以降に日本の通信社による報道文の翻訳から使用が広まった。これは、中国語においては日本語からの意味借用と位置づけることができる。その後、1990年代ごろから中国語における“赤字”は、財政や収支決算のみにとどまらず、ほかの数値で表わすことのできる事象の「不足」や抽象的な事柄の「不足」まで意味拡張された。これは中国語のなかで起こった意味変化と位置づけることができる。本論文は、“赤字”を例として、中国語が日本語の語を借用し、さらにその借用語が中国語のなかで意味変化を起こす過程を考察するものである。

キーワード 赤字 語誌 借用 意味変化 日中語彙交流

借用日语词的汉语词汇及其语义演变

——以“赤字”为例——

摘要 日语中的“赤字”一词含有“支出超过收入”的语义。1930年以后，该词作为新词而流行，使用范围迅速扩大。这一词义在当代也得到了沿用。同时，汉语中的“赤字”一词也包含“支出超过收入”的意思。1931年以后，经由对日本通讯社新闻稿件的翻译，该词的使用在中国得以广泛扩散。汉语“赤字”新义的产生，可以界定为对日语“赤字”的语义借用。自1990年代开始，汉语中“赤字”一词的使用发生了语义扩张，从财政或收支结算等经济活动领

域进一步扩展到了用来表示广义上的数值不足或抽象事物的缺乏。这种现象则可以界定为该词在汉语中产生的语义变化。本文以“赤字”为例，对汉语借用日语词并发生语义演变的过程进行研究。

关键词 赤字 词汇史 借用 语义演变 中日词汇交流

はじめに

日本語の「赤字」を『日本国語大辞典』でひくと「(収支決算で、不足額を表わす数字を赤色を使って記入するところから) 収支決算の結果、支出が収入より多いこと」と書かれている。同書の語誌欄には「現在一般的に使われる意は、明治以後に新たに出現したものと思われる。現代中国語の“赤字”は、日本語の“収入より支出が多い”“欠損”という意味だけ伝わったものと見られる」とある。一方、中国語の“赤字”も、『現代汉语词典』の第7版(2016)には「経済活動において支出が収入を上まわった差額の数字を指す。簿記においてこの種の金額を記載する時に赤い筆記具で書くためである」と解説されている¹⁾。これら辞書の記述を根拠にすれば、日本語の「支出が収入より多いこと」という意味の「赤字」は明治以後に新たに出現し、中国語の“赤字”はその日本語が伝わったものだと言えそうである。しかし近年、中国語には“生态赤字”“文化赤字”“信任赤字”のような二音節語と“赤字”で構成されるフレーズが生まれている。これらは財政や収支決算とは関係のない用語であり、また日本語にも見られない用法である。

本論文は、「赤字」が「支出が収入より多いこと」の意味で明治以後の日本語で使われ始め、その後中国語へと伝わったという『日本国語大辞典』の仮説を元に、その伝播の過程を検証していく。まず、日本語資料に現れる「赤字」を調査する。次に中国語資料に現れる“赤字”を調査し、中国語

1) 原文：“指经济活动中支出多于收入的差额数字。簿记上登记这种数目时，用红笔书写。”

における“赤字”の借用過程を検証する。さらに、中国語が日本語から“赤字”を借用したのちの意味変化を追跡し、借用から意味変化に至るまでの一連の流れを“赤字”を一例として考察するものとする。

1. 「赤字」の出現時期

1.1 新聞データベースによる調査

まず、日本語で「支出が収入より多い」という意味の「赤字」が使われはじめた時期を特定するため、国立国語研究所の『日本語歴史コーパス(CHJ)』による調査を行なったが、その検索結果はゼロであった²⁾。

次に、新聞のデータベースによる調査を行なった。田中編(2020: 3-4)によると、『日本語歴史コーパス』には新聞が含まれていないからである。対象としたデータベースは、日本語は『朝日新聞聞蔵Ⅱ』および『読売新聞ヨミダス』で、中国語は『大公報』および『申報』である。結果は図1のとおりとなった³⁾。

図1から分かることは次のとおりである。1929年以前には「支出が収入より多い」という意味での「赤字」は日本語にも中国語にも見られない⁴⁾。1930年にまず日本語で現われはじめ、その後急増した。1931年内には早くも中国語で現れ始めた。日中戦争中にはどちらの言語においても徐々に頻度が下がっていったが、戦後にまた増加した。

2) 国立国語研究所(2020)『日本語歴史コーパス』(バージョン2020.3, 中納言バージョン2.5.2) https://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/chj/ (2020年12月6日確認)

3) 『大公報』および『申報』は全文検索による結果であるが、『朝日新聞』および『読売新聞』は見出しのみの検索結果である。

4) 調査の段階で、「赤十字社」の短縮形である「赤字社」や、中国語における「赤」の字」という意味での“赤字”など「赤字」および“赤字”という文字列は1929年以前にも見られるが、これらは集計から除外し、図1には「支出が収入より多い」という意味の「赤字」のみを集計した。

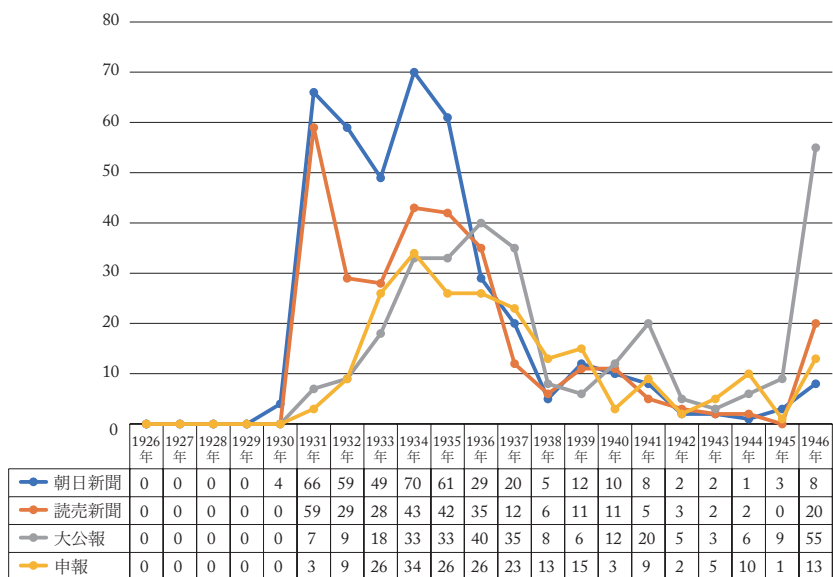


図1 新聞データベースによる「赤字」の出現頻度

1.2 現行の辞書の用例調査

次は現行の辞書による用例を確認した。まずは日本語の辞書からである。

- (1) 【赤字】帳簿に不足額を赤インクで記入するところから支出が収入より多いこと。(中略) ◇小林秀雄「新人Xへ」(昭和10) ジャーナリズムはこれ以上純文学の赤字に堪へられるか、◇谷崎潤一郎「私の貧乏物語」『中央公論』(昭和10・1号) その時代に一旦膨張した生活費をその後徐々に切り縮めることが困難なところから、斯くの如く始終赤字に悩むのであるが、[『明治大正新語俗語辞典』6頁]
- (2) 【赤字】②(収支決算で、不足額を表わす数字を赤色を使って記入するところから) 収支決算の結果、支出が収入より多いこと。欠損。*家族会議(1935)〈横光利一〉「新設備で赤字を出して」*北東の風(1937)〈久板栄二郎〉「ここ二三期は会社も赤字つづきで」[『日本国語大辞典(第二版)』第1巻131頁]

- (3) 【黒字】②(中略) *話の屑籠〈菊池寛〉昭和八年(1933)三月『オール読物』も創刊以来赤字であったが十一月号から漸く黒字になった」
[『日本国語大辞典(第二版)』第4巻1127頁]

日本語の「赤字」は辞書の用例では最も早いもので(3)の1933年であった。続いて中国語の辞書の用例である。

- (4) 【赤字】指经济活动中支出多于收入的差额数字。1934年《新知识辞典》：“赤字：日语‘赤字’，指支出超过收入的意思。”◇红字。[《近现代辞源》96頁]

- (5) 【赤字】经济活动中支出多于收入的差额。[例] 她的赤字公债，战前已超过一百万万元，二年战争又需用一百万万，如果不能从中国攫取大量金钱，到了明年夏秋间，甚至明年春天，日元一先令二便士的汇兑率便难以维持了。(陈独秀《从国际形势观察中国抗战前途》1938年) [《100年汉语新词新语大辞典(1912年-2011年)》上卷60頁]

中国語の辞書では、(4)で挙げられている《新知识辞典》の1934年が最も早い用例であった。

1.3 新語としての「赤字」のたまかな出現時期

以上の新聞データベースによる機械的な集計調査と現行辞書の用例を見る限り、まず日本語で「支出が収入より多い」という意味での「赤字」が1930年に登場した。続いて中国語でも1931年には出現した。その後、どちらの言語でも使用され、現在にも残っている。このことから、「赤字」の用例を探していくにあたっては、1930年前後がひとつの目安になり得ると思われる。次節より、1930年前後の資料に当たった結果について述べる。

2. 「赤字」の語誌調査

2.1 日本語資料に現われる「赤字」

前節で見たとおり、日本語の新聞の見出しには「赤字」の用例が1930年から現われはじめているが、(1)~(3)の現行辞書に掲載の用例は1933~1935

年と少し遅れている。このことから、報道資料のほうが雑誌記事や文学作品よりも早いのではないかと考えられる。

新聞では、次の例文(6)のように1929年以前の用例が確認できる⁵⁾。(引用部下線は筆者による、以下同)

(6) 赤字を出さぬやう整理せよ 鈴木商店専務 金子直吉

大日本帝國と言ふ大會社の貸借対照表中借の一方即ち財産が六十億圓消失したから之を理論通り抹消すれば夫丈け赤字が出るから上下を通じて大変な番狂ひが生じる茲に於て此赤字を出さぬ様に整理仕様と言ふのが復興事業の大體であるが [『朝日新聞』1923年10月13日大阪朝刊5頁]

ただし、1923年の時点では新聞記事の見出しになるほどではなかったため、それほど一般的に使われた用語であったとは考えにくい。記事の見出しになるころの1930年の用例は次のとおりである。

(7) 四年度の決算は二三百萬圓の赤字 歐州対戦以來の現象

結局四年度実績としては約二三百萬圓の赤字が出る事が判明した [『朝日新聞』1930年8月22日東京朝刊2頁]

(8) 郵船も遂に無配に決す

濠州紐育航路を最として南米、北米航路何れも赤字を見るの悲況である為め遂に五分配當を放棄し…… [『読売新聞』1930年10月16日朝刊3頁]⁶⁾

1930年から新聞記事の見出しで「赤字」の使用が見られはじめ、その後急増していったのであるが、それはいかなる要因によるものであろうか。例文(7)の元記事には、昭和四年(1929年)度の財政決算実績に歳入不足が生じ、新規剰余金が発生せず、過去繰越の剰余金で穴埋めしなければならないことが書かれており、そのような事態が「歐州対戦以来かつて無かつた現

5) 朝日新聞蔵Ⅱでは見出し検索しかできないため、全文検索可能な神戸大学新聞記事文庫で検索した。その結果として大阪朝日新聞 日本(19-092)が得られたため、それをもとに朝日新聞蔵Ⅱにて紙面を確認した。

6) 例文(8)の読売新聞の用例は本文確認により発見したものであるため、見出し検索の結果を集計した図1の集計には入れていない。

象」と指摘している。

当時の「赤字」ということばの流行について、小汀（1932: 203）は「近頃赤字といふ言葉が大變流行するね。（中略）今年の大學専門學校での連中が銀行や會社へ入るについて常識試験には大抵この「赤字とは何ぞや」が出たんだ。すると君見たいに赤字の意味を知らないものが非常に多くてね、大抵は落第さ」と述べている。引用文中の「今年」が具体的に何年かはわからないが、小汀（1932）の序文が1932年2月付けで、出版年月日は1932年2月20日であることから、1932年2月以前のことについて書かれていることは明白である。

新聞記事の内容と小汀（1932: 203）から、「赤字」の使用が盛んになった背景として、昭和4年（1929年）の決算実績から日本の財政状況が悪化し歳入不足に陥ったことが判明し、その不足を補うためには公債を発行しなければならないということが1930年の新聞記事で大々的に報道されるようになった。その報道とともに「赤字」ということばも「支出が収入より多い」という意味で流行したのだと考えられる。

さらに1930年代前後の「赤字」の出現状況を確認するため、当時の新語辞典の類を見ておきたい。

- (9) 赤字 豫算が歳入減のために不足すること。[社会ユーモア研究会編（1932: 219）]
- (10) 赤字 簿記で収入から支出を差引き収入超過金額は黒インクで、不足金額は赤インクで書くことから、財政上の不足、會社、個人の収入不足を赤字が出たといふ。[大阪毎日新聞經濟部編（1933: 3）]
- (11) 赤字 収支計算に於て、支出が収入よりも超過する場合にいふ語。差引して支出の多いときに、「赤字が出た」といふ如き是。簿記に於て決算の結果生じた不足金額を赤インキで記入するからの名。[三省堂百科辞書編輯部編（1934: 15）]
- (12) 赤字 簿記で収入から支出を差引き、収入超過金額は黒インクで、不足金額は赤インクで書くことから出た語。世界的不景氣時代では、會社・商店は云ふに及ばず、個人の家庭から一國の經濟まで赤字問題で

やかましい。この反対に一寸でも黒字を出したりすると好景氣來などと騒がれる。[新潮社編輯部編 (1936: 2)]

このように、1932年に出版された辞書から「赤字」は収録され始めたが⁷⁾、1936年の辞書においてもなお新語の範疇にあったことがわかる。(10)、(11)と(12)において由来が簿記用語であることが示唆されているが、このことについては第3節で検討することとして、次に、中国語資料における「赤字」の出現状況に移る。

2.2 中国語資料に現われる“赤字”

中国語資料に見える“赤字”は、早いもので1931年の用例がある。

(13) 日本歳入預定過大 赤字問題引起各方非難

東京三日新聯電、關於五年度歳計之赤字問題、貴族院方面亦甚重視、(中略)又當面重大問題之五年度歳計所發現之赤字問題、已明白暴露其財政政策之破綻、[《大公報》天津版1931年4月4日4版]

(14) 大藏當局爲要打開這難局起見、極力設法財政整理、打算在既定經費項下、節約一億圓來彌縫這赤字、[《申報》1931年11月16日8版]

(15) 此外、行政整理變成了不爆發的子彈、來年度預算的『赤字』(不足額)增加、甚至於民政黨奉爲最高政策的金解禁也因為現貨流出的激增而感到了再禁止的必要。[《東方雜誌》1932年2月1日第29卷第3号]

例文(13)と(14)は《大公報》と《申報》における最も早い用例である。いずれも日本の財政状況を日本の通信社からの情報として掲載する際に用いられている。例文(15)は当時月2回発行の雑誌《東方雜誌》の日本の政治に関する雑誌記事であるが、中国人の記者の署名入り記事である。1931年には日本の通信社の情報を掲載するときに用いられた“赤字”が、翌年には中国語話者によって早くも使われはじめたということが言える。しかし、1932年の時点では中国語としても定着していなかったせいも、後ろに“(不

7) 「校正刷の訂正字」の意味としての「赤字」は東亜書院編輯所編 (1930: 6) から見られる。

足額)”との但し書きを入れている。

次に、新語としての“赤字”を解説した雑誌記事を見ると、1931年が最も早い例である。

(16) 「赤字」二字，是我抄的一個日本新應用的名詞，用來敘述世界各國財政困難的情形的。(中略) 凡決算與預算比較，歲入超過歲出，其超過額稱為「剩餘金」，反之，歲出超過歲入，日人稱之為「赤字」。所以「赤字」就是入不敷出的意思。[《新社会》1931年9月]

(17) 赤字 這是一個日本常用的名詞。是簿記上的用語。凡收支不能相抵，如因支出比收入多，或收入比豫定少，以致豫算不足，就用赤字二字表之。原來一般商業上的習慣，在損益計算表上，如果有收益的，多印黑字，而虧損的多用赤字。所以赤字便成為入不敷出的代名字。[《申報月刊》1932年12月]

1931年の(16)では“赤字”を「日本が新たに使用する名詞(“日本新應用的名詞”）」としているのに対し、1932年の(17)では「日本が常用する名詞(“日本常用的名詞”）」と解説している。1931年から1932年の1年間で「新たに」から「常用する」と解釈が変わっている点が注目に値する。また、どちらも日本語由来であることを明言している。

最後に、辞書の掲載例を確認しておきたい。どれも新聞や雑誌の記事より遅れて収録されはじめたことがわかる。

(18) 【赤字】財政豫算決算上收入不敷之數，因用紅字為記，故名。[《新名詞辭典》1934年6月初版]

(19) 【紅字公債】簿記上登記之慣例，凡不敷之數，均用紅字標明。引申之，凡各國預算案之結算，其支出多於收入時，均不免發現紅字。欲填補紅字使收支足以相抵而起募之債，即謂之紅字公債，亦稱赤字公債。[《實用商業辭典》1936年6月三版(初版は1935年10月)]

(20) 〔赤字〕日語赤字指支出超過收入的意思。國家在預算不能平衡時所發的公債，叫做『赤字公債』。[《新知識辭典》1937年6月三版(初版は1934年9月)]

(20)の《新知識辭典》の語釈は《近現代辭源》に掲載されていた(4)の用

例を原典に当たって確認したものである。ただ、1934年初版のものは見られず、1937年三版しか見ることができなかった。(19)は“赤字公債”としても見出しが立てられていたが、“即紅字公債。詳「紅字公債」條。”とだけ書かれており、語釈は“紅字公債”の項にあった。いずれにせよ、今回確認できた限りでは、(18)にあるとおり1934年の辞書より“赤字”が掲載されはじめていたことがわかった。

まとめていえば、中国語における“赤字”は、「収入より支出が多いこと」の意味では1931年から日本の通信社の翻訳記事で使われ始めた。その後は日本の財政状況を伝える記事に留まらず、中国語として活用され1934年には新語に特化した辞書に収録されたのである。

3. 「赤字」の由来は簿記の用語か

3.1 複式簿記受容の歴史的背景

これまでに挙げた用例あるいは辞書の語釈には、「赤字」が「支出が収入より多いこと」の意味で用いられるようになったのは、簿記でそのような数字を赤い字で記入していたからだとする言説が多く見られる。本節ではこの「赤字」簿記由来説について考察する。

現代の日本と中国で使われている複式簿記の起源は、西洋で生まれたものである。近代化を目指した時期に受容された複式簿記の方法は現在も使われている。複式簿記が日中両国へ伝播した歴史的背景は次のとおりである。

実務としての簿記の起源は議論の分かれることであるが、現代にまで続く複式簿記の知識が文献に記載されたのは1494年のルカ・パチョーリによるものが最初とされている⁸⁾。パチョーリの書いた簿記論は、商人の活動、あるいは他の簿記書や教科書を通じてヨーロッパ各地に広がっていった⁹⁾。

日本で複式簿記の理論が文献として世に出たのは、1873年12月の『銀行

8) 小島 (1965: 223)。

9) 中野・清水編 (2014: 19)。

簿記精法』が最初である¹⁰⁾。当初は御雇外国人の口述筆記あるいはアメリカの簿記書の翻訳が主であり、英語で記述あるいは口述された知識が日本語へ翻訳された。日本人の著者による独自の解説書が出始めたのは1877年からである¹¹⁾。文部省の「学制」により簿記が義務教育へ組入れられたことの影響もあり、1877年以降は数多くの簿記書が出版された。

一方、中国はといえば、複式簿記の文献の嚆矢としては1905年の《連環帳譜》が最初である¹²⁾。しかし、《連環帳譜》は帳簿の例示が主であり解説文がほばないに等しく¹³⁾、あまり流布しなかった。1906年以降は日本の簿記書が翻訳出版されるようになり、複式簿記の用語に関しても、“借方”や“貸方”など、一部に日本の漢語をそのまま用いた用語が定着した¹⁴⁾。

以上の歴史的背景をふまえれば、「赤字」が簿記由来とすると、少なくとも明治期に日本で翻訳された簿記文献にその概念がありそうである。

3.2 複式簿記文献における「赤字」

1873年以來の日本語の簿記文献から見ていくと、日本初の複式簿記書である『銀行簿記精法』には赤字で書くべきというような記述が見当たらない。以下の(21)は1874年に出版された福澤諭吉の『帳合之法 二編』の例で、(22)はその原著である英語の文献の原文である（下線は筆者による）。

(21) 都テ大帳ニ記シタル朱書ハ此勘定口ヨリ他ノ勘定口ヘ移ス歟又ハ同シ勘定口ニテモ一度ヒ記シテ又重テ其勘定中ノ他ノ場所ヘ移ス可キ箇条ノ印ナリ [『帳合之法 二編』卷四29ウ (1874年)]

(22) An entry in red ink on the Ledger, denotes that the amount thus written is

10) 西川 (1982: 3, 17) 参照。福澤諭吉による1873年6月の『帳合之法 初編』は西洋式単式簿記の紹介としては最も早いものであったが、複式簿記は1874年6月の『帳合之法 二編』となってからである。

11) 西川 (1982: 65)。

12) 郭道楊 (1988: 313)。

13) 潘序倫 (1941: 7) 「その著わしたる本は、例題の提示は詳しくとも解説が不足していた (原文: 其所著之書, 設例詳備而釋理不足)」

14) 戸谷 (2019: 148-151)。

to be transferred, either to some other account, or to another position under the same account. [Bryant and Stratton's Common School Book-keeping, 1871 p. 144 (帳合之法の原著)]

(22)の英語の原文で“in red ink”となっている箇所が(21)では「朱書」と訳されている。

ところで、(22)の“is to be transferred”とはいかなる意味であろうか。これを知るためには、複式簿記のルールを理解しておかなければならない。複式簿記のルールでは、ひとつの取引を二つの方向（「借方」と「貸方」）に分けて記帳する。記帳する際には、適当な勘定科目を用いなければならない。費用と収益について、期中は様々な勘定科目を使用しているが、期末決算の際にどの勘定科目も「損益」に集約する。このとき、各勘定科目の借方と貸方の差額を算出し、「損益」へ振り替える手続きをする。この他の科目へ「振り替える」という手続きが“is to be transferred”であり、このときに他の科目へ振り替える数字を赤で書くというのが複式簿記のルールである。そのルールが(22)では“An entry in red ink on the Ledger”と表現され、福澤諭吉はそれを「朱書」と訳したのである。

ただし、「損益」は文字どおり「損失」と「利益」の両方を指しており、損益勘定の残高が借方に残れば損失、貸方に残れば利益を示すことになる。したがって、複式簿記のルールにおいては、損失を赤字で書くのではなく、貸借差額を他の科目へ振り替えるときにその数字を赤字で書くのである。

以下の図2は損益勘定の元帳の記入例で、貸借差額を資本金勘定へ振り替える例である。最終的には利益が136圓98銭で、その数字を赤字で書いている。

では、1873年以來の簿記文献に「赤字」ということばそのものがどれほど出現するのであろうか。筆者は、1873年から1939年までの簿記文献108種を閲覽し、それぞれの文献における「赤字」に相当する語句を調査した。その調査の結果を表1に示す。

調査の結果、1873年から1939年までの簿記文献108種のなかで、「赤字」を用いた文献は堀口義三(1889)『商業簿記教科書』のただ1例のみであった。

18 損 益

8	31	商 品	元 1		270 000	貸	270 000
〃		營業用什器	元 4	1 000		〃	269 000
〃		營業費	元 10	128 500		〃	140 500
〃		割引料	元 14	3 520		〃	136 980
〃		資本金	元 6	136 980			0
				270 000	270 000		

簿記法

図2 『師範学校簿記法教科書』86頁に見える振替の赤字表記の例
(広島大学図書館教科書コレクション画像データベースから部分拡大)

表1 簿記文献別「赤字」相当語句の種類と割合

語	文献数	割合
朱記 (ス・スル)	41	38.0%
朱 (ヲ・ニテ)	13	12.0%
朱書 (ス・スル)	11	10.2%
赤記 (ス・スル)	8	7.4%
赤 (で・にて)	3	2.8%
赤字	1	0.9%
その他	2	1.9%
なし	29	26.9%
合計	108	100.0%

表1の調査結果より、「赤字」の使用は簿記文献においては、あまり一般的ではなく、きわめて少数であることがわかった。

3.3 「赤字」はどこから来たのか

「赤字」は簿記の用語からと言われてはいるものの、簿記文献に「赤字」はほとんど出現しない。とすれば、「赤字」はどこから来たのであろうか。

ここでは二つの可能性を挙げておきたい。

一つめの可能性は、銀行で使われていた職業語由来である。1914年に出版された『最新簿記辞典』に、見出し語「赤残」がある。その語釈には次のように書かれている。

(23) 【赤残】 記帳上の貸借関係に於て借方金額の残高出づべき處に貸方の額残り、貸方金額の残高現はるべき處に借方の額残りたるときは其の反対欄との差額を貸借何れか其の残高の出づべき處へ朱記して帳簿上の平均を保しむるものなり、此の場合にありて朱記せる金額を赤残といふ。而して又此の赤残なる言葉は其の本義より轉じて銀行にて「彼は赤がある」「彼は黒なり」と称し、前者は赤残の意にて貸越ある者なりといふ意、後者は預金者なりといふ意に用ふ。蓋し銀行に依ては預金は黒インキにて記入し行き貸越となりたる場合に其の額丈けを赤インキにて記入する事あるが故なり。[『最新簿記辞典』2頁(1914年)]

(23)の前半部分(「記帳上の」から「赤残といふ」まで)は、一見すると複式簿記のルールと同じく、借方と貸方の差額を算出し、その数字を赤い字で書くことを言っているように思える。しかし、「借方金額の残高の出づべき處に貸方の額残り」と「貸方金額の残高の現はるべき處に借方の額残りたる」というように、いずれも好ましくない方向に残高があることについて言っている。複式簿記のルールでは赤字で記録すべき数字に「好ましくない」というような記録者の主観を反映させる機能はないが、少なくとも1914年の時点では、そのようなイメージがあったらしい。(23)の後半部分(「而して」から「故なり」まで)は、そのイメージが銀行内では預金者の属性分類にまで派生し、「彼は赤がある」といえば当座貸越、すなわち当座預金の残高がマイナスになっていることを表したという。つまり、複式簿記により帳簿記入を行なっている人々、あるいは銀行へ勤務する人々により、「赤」がマイナスの数字を表すイメージで使われ、単なる借方と貸方の差額が、いつしか好ましくない数字を表すようになったのである。

二つめの可能性は、英語からの借用である。3.1節で述べたように、日本における複式簿記受容のはじまりは、英語の文献の翻訳からである。3.2節

では各勘定科目の借方と貸方の差額を算出し、他の科目へ振り替えるときに“red ink”で記帳するというのが、もとの文献にも書かれていたことを確認した。この“red”には損失 (loss) を表す用法がある。“red”が損失の意味を表す最も早い出典として、Oxford English Dictionary (以下“OED”とする) は、1907年の *Money and Investments* を挙げている。OEDが掲げる出典の内容は次のとおりである。

- (24) 1907 M. ROLLINS *Money & Investm.* 314 Formerly it was customary, and is now with some bookkeepers, to make an entry of a loss in red ink, from whence arose the term ‘in the red’, always indicating a loss. (筆者訳：1907年 M. Rollins *Money and Investment* 314頁 かつては赤インクで損失を記入することが習慣であったし、今もそのような習慣の経理担当者が何人かおり、そこから“in the red”ということばが生まれ、常に損失を意味している。) [Oxford English Dictionary: OED Online 閲覧日：2020/9/20]

ただ、ここで注意しておきたいのが、OEDが最も早い用例として掲げる *Money and Investments* は簿記の文献ではないという点である。それもそのはずで、3.2節で見たとおり、複式簿記のルールでは、借方と貸方の差額を出し、それを他の科目に振り替えるときに赤い字で記入するのであり、損失を赤い字で記入するというルールはないからである。にもかかわらず、英語では1907年の段階ですでに“red”に「損失」の意味があった。ということは、日本でも英語の“red”が「損失」の意味をもつと認識され、その“red”を日本語が翻訳借用したのだという仮説も立てられる。その仮説を検証するために1930年前後の英和辞典を中心に調査すると、最も古くて1933年の『研究社英和商業経済辞典』に「be put in red 赤字 (欠損) 記入」とあるのを認めた。

ほかに、アメリカの銀行でおこなわれていた記帳方法である「ボストン式元帳」を紹介した書籍が、赤字での記入に言及している。最も早いものでは鈴木 (1901: 609) が「赤インキヲ以テ記入ス」と紹介しており、岩垂 (1935: 89) はボストン式元帳の長所として「貸越 (即ち借方残) 高は総て赤記する

やうになつてゐるから」と書いている。いずれも「赤字」の語そのものを使用してはいないが、赤字での記入による記帳方法を紹介したものである。

以上をまとめると、1930年より前に「赤字」そのものの使用はあまり見られなかったが、まず簿記のルールで、朱あるいは赤で書くべき数字が決められていた。簿記の定めたルールでは、赤字で書くべき数字は他の科目へ転記する貸借差額のことであったが、いつしか好ましくない差額、すなわち「不足」または「損失」のことを指すようになった。「不足」または「損失」を表わすようになったのは、(23)を根拠とする帳簿記入者あるいは銀行勤務者による職業語由来か、(24)および「ポストン式元帳」を根拠とする英語からの翻訳借用が考えられる。

好ましくない数字を表わす「赤字」が広まった要因のひとつとして、明治から昭和初期を通して「赤」を構成要素にもつ複合語に強いマイナスイメージが定着していたことが挙げられる。沖森(2010:162-163, 169-170)は、「アカ」のマイナスイメージは江戸時代から多く見られ、明治以降は「相当に多い」と指摘し、「赤本(俗悪・低級な本)」や「赤切符(三等の切符。また人や物の下等なことのたとえ)」などをその例として挙げている。「赤字」もその「赤」のもつ強いマイナスイメージにより「不足」や「損失」というような好ましくない状況を表わすことばとして人々に容易に受け入れられ、当時の流行に拍車をかけたのだともいえよう。

4. 中国語における「赤字」の借用と定着後の意味変化

4.1 中国語における「赤字」の借用

2.2節で見たとおり、日本語で使用の増加した「赤字」は中国語に借用され、そのまま“赤字”として使われるようになった。もちろん、中国語にもともと“赤字”という語がなかったわけではない。《汉语大词典》は次の二つの用例を挙げている。

(25) 【赤字】①红色的字。《梁书·武帝纪上》：“三正迭改，五運相遷，緑文赤字，徵《河》表《洛》。”清蒲松齡《聊齋志異·赤字》：“順治乙未

冬夜，天上赤字如火。其文云：‘白晝代靖否复議朝治馳。’。[《汉语大词典》第9卷1160頁]

《汉语大词典》によれば、清代の小説でも「赤い字」という意味での“赤字”の用例があったということである。

中国語の“赤”について、遠藤（1996）によると「かつて“赤”は五色の一つで、いわゆる基本色彩語彙であった。しかし「色彩語の“赤”は、口語ではほぼ消滅してしまっており、基本色彩語彙は“紅”に取って代われ、現代語としての“赤”は“赤脚”“赤貧”のように「むきだしである」「何もない」という色彩以外のことを意味する場合が多い」という¹⁵⁾。

基本色彩語としての“赤”は“紅”になったのではあるが、「赤い字」という意味での“赤字”という語の存在もあった。次の(26)のように、1933年の《申報》の広告欄に見える“赤字”は「赤い字」という意味で使われている。

(26) 國際爭執地，本圖均用赤字標注，並說明其背景內容，於太平洋問題，更特別注重，[《申報》1933年7月]

この“赤字”が1931年以降は日本語の「赤字」から「支出が収入より多いこと」という意味のみを借用したといえる。これは、借用のうちの意味借用で、亀井・河野・千葉編（1996: 6巻: 669）がいうところの「在来の形式の意味範囲の拡張」である。

ただ、(19)の《實用商業辭典》のように、日本語の「赤字」を“赤字”ではなく“紅字”で借用しようとした例がある。もし“紅字”で借用していれば、これは借用のうちの翻訳借用にあたるであろう。だが、“紅字”が使用された例は、(19)の他にほとんど見つからなかった。原因は、“紅”が中国の会計用語としてはすでにある一定の意味に限定されていたためである。

15) 確かに現代中国語で“赤”が単独で使われることはなく、形態素として造語成分のはたらきを担うことしかできない。たとえば、《現代汉语词典》の第7版では、“赤”ではじまる語を30個収録しているが、その30個のうち、“赤潮”“赤小豆”“赤紅”“赤鹿”“赤眉”“赤小豆”“赤眼鱒”“赤字”の8個のみの“赤”が「赤い」という意味をもつ形態素である。

根岸（1906: 107）および有本（1930: 50）によれば、中国固有の簿記法で、年度末の決算により利益分配を記録する帳簿は“紅賬”と呼ばれていたという¹⁶⁾。「利益」を意味する“紅利”や、「利益分配」を意味する“分紅”もおそらく“紅賬”をもとに造語されたものと思われる。もちろん“紅利”と“分紅”の語誌はそれぞれ別途検討を要するものであるが、黄河清編著（2020: 上巻: 453, 657）によれば、“紅利”は1915年の用例があり、“分紅”は1919年の用例があるという。少なくとも、日本語の「赤字」が伝わる1931年には、形態素“紅”を含む会計用語が「利益」を想起させることばであったことは間違いない。だとすれば、「不足」や「損失」を意味する「赤字」を翻訳借用して“紅字”とするのには抵抗があったはずだ。「利益」と「損失」は反義語の関係にあるからである。

以上から、日本語の「赤字」が中国語へ借用される際に、同じ漢字をそのまま使った意味借用となるか、“紅字”のように翻訳借用となるかのゆれがあった。しかし翻訳借用となった場合、形態素“紅”で構成される用語がすでにあり、しかもその用語のもつ「利益」に直結する意味が日本語の「赤字」が示す「不足」や「損失」とは反義関係にあったため、定着することはなかった。その結果、意味借用の“赤字”が残ることとなったのである。

4.2 中国語における“赤字”の意味変化

借用語として日本語から取り入れられた“赤字”は、中国語では意味変化が起っている。次の3つの例を見てみたい。

(27) 岂不知当前中国最大的赤字、最严重的隐患并不在此，而在于人才赤字。[《中国人力资源开发》1993年]

(28) 全球最大的“赤字”，是人才赤字。[《云南科技管理》1998年]

16) 根岸（1906: 107）は「大清賬及毎年結算期ニ結算セル結果ハ之ヲ一本ニ製セザル可ラズ其用紙紅ナルヲ以テ之ヲ紅賬ト號ス」と述べ、有本（1930: 50）も「賬單の形式は折疊式になつて居つて、結彩といふ二字を以て見出として居る、用紙は紅色であつて、俗に紅賬と稱せられて居る」と述べるように、“紅賬”は帳簿として使う紙の色からきている。

(29) 心理问题解決的是心态冲突问题，消弭的是信任赤字；学理问题解决公理冲突问题，消弭理解赤字；伦理问题解决沟通方法的冲突，它所消弭的也是信任赤字。〔《山西大学学报（哲学社会科学版）》2004年〕

(27) と (28) はいずれも“人才赤字”というフレーズを形成している。(27) は人材の少なさを指摘する文章のなかで使われていて、(28) は人材不足がテーマの文章で使われている。いずれも「人材不足」の意味と解釈できよう。

(29) には、“信任赤字” および“理解赤字” というフレーズが出て来ている。これらは「信頼の不足」および「理解の不足」といった文脈で使われている。「人材」の不足ならば具体的な数として見ることもできるが、「信頼」や「理解」ともなると抽象的で数値化することは難しいものである。

このように、“赤字”を財政や収支決算以外の文脈で単なる「不足」という意味で用いるようになったのは、意味変化のうち、意味拡張に相当する。このような「不足」の用例は日本語ではほとんど見られない。ただ、中国語でも広く一般的に用いられる表現ではないせいか、《现代汉语词典》などの規範的辞書にはこの意味は掲載されていない。最近の新語辞典には次のフレーズが掲載されていた。

(30) 【生态赤字】因生态资源的不合理对待而使得耗损大于积蓄的现象。◇生态赤字给民族生存带来危机。(文汇报, 1989.8.20) [《新词语大词典1978-2018》765页]

(31) 【文化赤字】即“文化透支”。◇中国近百年文化透支和文化赤字的严重仍然没有引起学界注意：一个世纪以来，中国从西方翻译了近10万本书，但是西方实际翻译的中文书却仅仅百余本。(人民日报海外版, 2003.6.13) [《新词语大词典1978-2018》932页]

(30) の“生态赤字”は、生態資源の消耗が蓄積を上まわることを指し、(31) の“文化赤字”は文化の輸入超過、つまり貿易赤字であるという解釈で、用例では自国が西洋諸国から翻訳した文献の数と西洋諸国が翻訳した文献の数を比べ、前者が後者を大きく上まわるという文脈で使われている。いずれも「入りと出を比べると好ましくない数字のほうが増加している」という意味で、財政や収支決算とは関わりのない事象へと用法が拡大していることが

わかる。

彭広陸（2005:14）は「日本語からの借用語が「借用され先」の中国語のなかで一人歩きをするようになり、いろいろと変容している例も見られる」と述べている。“赤字”の意味変化もこのような例のひとつとして当てはまるといえよう。

結 語

1930年以降日本語で流行語となった「赤字」は中国語に借用され、“赤字”として使用されるに至った。同じ漢字を使用した言語間に起った借用現象で、意味借用の一種として見ることができる。ただ、色彩語としての日本語の「赤」に相当する中国語は“紅”であったため、借用の過程で“紅字”のように翻訳借用されるような例も見られたが、中国語の“紅”が「利益」と直結する表現を有していたことから、そのような例は定着することはなかった。一方で、中国語の“赤字”は独自の変化を遂げ、財政や収支決算のみならず、広く数値で表せる事象の「不足」や「好ましくない差の増加」という意味で用いられるようになったばかりか、抽象的な事柄の「不足」といった意味でも用例が見られるようになった。これは中国語のなかで起こった意味変化である。

以上、「赤字」を例として、中国語が日本語を借用し、さらに中国語のなかで意味変化をとまなう過程を見てきた。本論文の提示した視点が日中同形語の研究に少しでも役に立つことを願っている。

参考文献

- 有本邦造（1930）『支那會計學研究』大同書院。
岩垂至（1935）『銀行実務講座 第5巻 銀行會計』非凡閣。
遠藤雅裕（1996）「中國語の色彩語彙赤の行方—臺灣方言の色彩語彙體系を中心に—」『中国文学研究』第22期，早稲田大学中国文学会，pp.166-182。
沖森紅美（2010）『色彩語の史的研究』おうふう。
小汀利得（1932）『漫談経済学』千倉書房。

- 亀井孝・河野六郎・千葉栄一編 (1996) 『言語学大辞典 第6巻 術語編』三省堂。
 小島男佐夫 (1965) 『複式簿記発生史の研究 (改訂版)』森山書店。
 鈴木鶴吉 (1901) 『三井銀行吹米出張員報告書』。
 田中牧郎編 (2020) 『コーパスで学ぶ日本語学 日本語の歴史』朝倉書店。
 戸谷将義 (2019) 「清末中国における複式簿記用語の形成—楊汝梅 (予戒) による下野直太郎『簿記精理』の翻訳とその影響—」『愛知論叢』106号, 愛知大学大学院生協議会, pp.131-154。
 中野常男・清水泰洋編 (2014) 『近代会計史入門』同文館出版。
 西川孝治郎 (1982) 『文献解題 日本簿記学生成史』雄松堂書店。
 根岸佶 (1906) 『清国商業綜覧 第一巻』丸善株式会社。
 福澤諭吉 (1874) 『帳合之法 二編』慶應義塾出版局。
 藤本怨一郎 (1905) 『師範学校簿記法教科書』文學社。
 彭広陸 (2005) 「中国語の新語における日本語からの借用語」『香坂順一先生追悼記念論文集』光生館, pp.3-24。
 堀口義三 (1889) 『商業簿記教科書』春陽堂。
 森下岩楠・森島修太郎 (1878) 『簿記学階梯 上』著者藏板。
 蔡錫勇 (1905) 『連環帳譜』湖北官書局。
 郭道揚揚 (1988) 『中国会计史稿 下册』中国财政经济出版社。
 潘序倫 (1941) 『論連環帳譜』《計學雜誌》上海東吳大學法學院計學雜誌社 第一卷第一號, pp.3-8。
 Bryant, H. B. Stratton, H. D. and Packard, S. S. (1871) *Bryant and Stratton's Common School Book-keeping; Embracing Single and Double Entry*. Ivison, Blakeman, Taylor, & Company.
 復刻版: (1994) 『復刻版 帳合之法原本 (仮題) 「普通学校簿記書」』洋学堂書店。
 Rollins, M. (1907) *Money and Investments*. Colonial Press.

辞書目録

- 大阪毎日新聞経済部編 (1933) 『新修経済語辞典』一元社。
 樺島忠夫・飛田良文・米川明彦編 (1984) 『明治大正新語俗語辞典』東京堂出版。
 社会ユーモア研究会編 (1932) 『社会ユーモア・モダン語辞典』鈴響社。
 三省堂百科辞書編輯部編 (1934) 『新修百科辞典』三省堂。
 新潮社編輯部編 (1936) 『現代新語小辞典』新潮社。
 東亜書院編輯所編 (1930) 『現代新語辞典』東亜書院出版部。
 中嶋鏡造・藤田仁太郎編 (1933) 『研究社英和商業経済辞典』研究社。
 日本国語大辞典第二版編集委員会 (2001) 『日本国語大辞典 第二版』小学館。
 簿記学研究會編 (1914) 『最新簿記辭典』勸業書院。
 陳稼軒編 (1935) 『實用商業辭典』商務印書館 (1936年6月三版)。
 顧志堅編 (1934) 『新知識辭典』北新書局 (1937年6月三版)。
 汉语大词典编辑委员会 (1992) 『汉语大词典』汉语大词典出版社。
 黄河清编著 (2010) 『近现代辞源』上海辞书出版社。

- 黄河清编著（2020）《近现代汉语辞源》上海辞书出版社。
亢世勇，刘海润主编（2018）《新词语大词典 1978-2018》上海辞书出版社。
宋子然主编（2014）《100年汉语新词新语大辞典（1912年-2011年）上卷》上海辞书出版社。
邢墨卿編（1934）《新名詞辭典》新生命書局。
中国社会科学院语言研究所词典编辑室編（2016）《现代汉语词典第7版》商务印书馆。

戸谷将義 Todani Masayoshi 愛知大学大学院中国研究科博士後期課程 専門：中国語学・日中借用語の史的研究